



ふくし・マイスター

平成 26 年度採択 文部科学省 地(知)の拠点整備事業(大学 COC 事業)

持続可能な「ふくし社会」を担う「ふくし・マイスターの養成」

中間成果報告書

知多半島からひろがるふくしの未来

ご挨拶

本学は2014(平成26)年度より、文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」の採択を受けて、取り組みをすすめてきました。今年度はその4年目にあたることから、これまでの成果を報告するとともに、今後の取り組み課題について認識を共有する機会として、このたびの中間成果報告フォーラムを開催する運びとなりました。本学のCOC事業は大きく分けて＜教育＞＜研究＞＜社会貢献＞について取組をすすめてきましたが、いずれも一定の成果を挙げることができていると考えています。

教育においては、7つの学部(通学制)すべてで、初年次から地域と関わり、地域の課題について学ぶ「ふくしコミュニティプログラム」を必修科目または全員履修科目の中で、実践しています。さらに、地域志向科目を10科目20単位以上修得し、その学びのふりかえり(リフレクション)ができた学生を、地域の課題解決に貢献できる「ふくし・マイスター」として認定し、輩出する取組をすすめています。

研究では、本学専任教員や市民研究員から、地域の課題解決に向けて実践的に取り組む研究を公募・助成し、その成果を地域に活かす取り組みをすすめています。地域の企業、事業所、NPO等の組織や自治体の連携・協力も得て、地域課題の解決に繋げていきます。

社会貢献では、連携する3つの市町(美浜町、半田市、東海市)に、市民や学生・教職員が地域のまちづくりについての活動や交流をする拠点として「Cラボ」を開設しています。地域の活性化、防災・減災、空き家の活用などについて、地域の様々な人の参加を得て検討する「地域円卓会議」の開催や具体的な活動支援などの取組をすすめています。

文部科学省からの補助を受けて実施する大学COC事業は、5年目となる来年度が区切りとなります。ただし、本学としてはこの成果をもとに、事業期間終了後も大学と地域との連携をさらに深め、教育の質向上と大学の地域貢献に取り組んでいく所存ですので、市民の皆さま、地域の組織・事業所の皆さま、自治体の皆さまには、引き続きご支援、ご協力を賜りますよう、お願いする次第です。



日本福祉大学 学長

児玉 善郎

Yoshiro KODAMA

目次

概要

1. ご挨拶
2. 「ふくし・マイスター」とは

教育

3. 「ふくし・マイスター」の養成
4. ふくしコミュニティプログラム
5. 各学部の取り組み - 社会福祉学部
6. 子ども発達学部 / 健康発達学部
7. 経済学部 / 国際福祉開発学科
8. 看護学部 / スポーツ科学部
9. 全学・学部共同・学内での取組
10. 「教育」領域 中間成果

研究

11. 市民研究員 研究概要一覧
12. 地域課題解決型研究 研究概要一覧
13. 研究交流会・報告会の実施
14. 「教育」領域 中間成果

社会貢献

15. 地域連携推進拠点を核とした取り組み
16. 知多半島に広がる協同・協働
17. 「社会貢献」領域 中間成果

COC+

18. 概要 - COC+ とは
19. 教育 - 参加大学で学び合う共有プログラム
20. 教育 - 日本福祉大学生で学び合う 本学独自プログラム
21. ひろがる岐阜県の輪・活動の輪

「ふくし・マイスター」とは

「ふくし」社会を担う人材=ふくし・マイスター

日本福祉大学は、制度中心の従来の「社会福祉」の枠を広げて、多領域が関連・連携しあう広い意味の福祉を「ふくし」ととらえて、様々な分野で「ふくし」の視点で活躍できる人材「ふくし・マイスター」を全学部共通の取組として養成します。この「ふくし社会を担う人材=ふくし・マイスター」は、大学の外の地域における他領域の人材や現場との関わりや活動を通じた学びをはじめ、地域について学ぶ地域連携教育により育成されます。

本学の3キャンパスが所在する美浜町、半田市、東海市を中心に、知多半島の多様な地域資源と学生の学びを結び付ける「地域志向学習」を1年次から4年次まで積み重ね、「ふくし社会」を担う力を高めた学生には、「ふくし・マイスター」の修了証が授与されます。

4つの力と期待する役割

「ふくし・マイスター」には、「市民力」「発見力」「率先力」「解決力」という4つの力が求められます。これらの力は、福祉の専門職だけでなく、地域に暮らす一人の市民として、さらにはあらゆる職業に携わるうえでも、広い意味の「ふくし」の実現に貢献するために必要とされる力です。少子高齢化が進み、格差や孤立の問題が深刻化するなど、現代社会は様々な問題を抱えています。地域社会を持続可能にするためには、暮らしや社会の課題に自ら参加して解決する力が必要とされます。これからの社会を担う学生たちには、自ら仕事を見つけてだし積極的に役割を担い、複雑な問題を解決する力がより強く求められています。複雑で見えにくい課題に対し、当事者意識を持って向き合うには「ふくし・マイスター」の4つの力が役立つはずです。

市民力

発見力

率先力

解決力

日本福祉大学が目指す「ふくし」社会とは

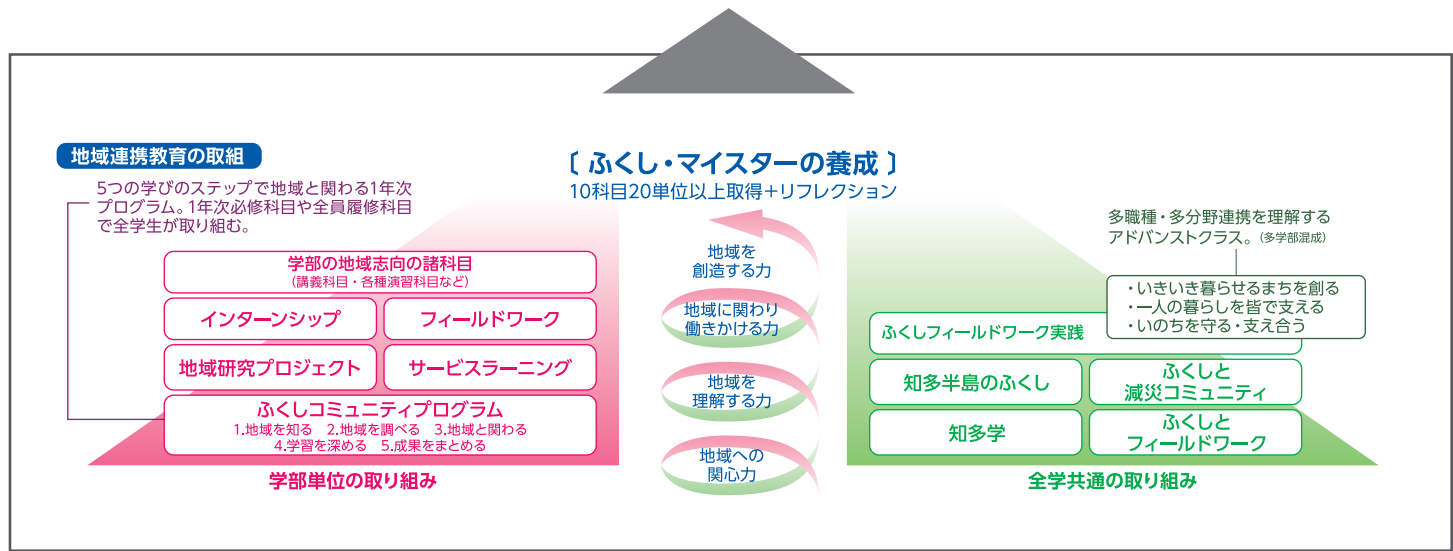
ふつうの くらしの しあわせ

「ふくし」とは、「ふつうのくらしのしあわせ」を表すもので、より多くの人たちに福祉に関心をもってもらい、身近なものとして捉えてほしいという意図が込められています。「ふつうのくらしのしあわせ」の主人公は、私たち自身です。「福祉」と聞くと、障害のある人やお年寄り、援助を必要とする社会的弱者を思い浮かべるかもしれませんが、しかし、「ふくし」とは他人事なのではなく、一人ひとりが「我が事」として認識することからはじまります。日本福祉大学の使命は、一人ひとりが「ふくし」の実現にむけて主体的に行動する社会にしていけることです。

日本福祉大学では、「建学の精神」のもと「地域に根ざし、世界をみざす『ふくし』の総合大学」として、地域社会と時代が求める人材を養成しています。本学の原点は、まさに「ふくし」人材の養成を通じた社会への貢献にあります。

「ふくし・マイスター」の養成

持続可能な「ふくし社会」
＝「知多半島モデル」の構築



「ふくし・マイスター」になるには

「ふくし・マイスター」になるには、以下の2つの条件が必要です。

- ①「所属学部+全学教育センター」の「地域志向科目」の中から、卒業時まで 10科目20単位以上を修得すること。
- ②1年次から4年次まで、毎年リフレクション(学習のふりかえり)を実施すること。

地域志向科目

地域志向科目は、各学部ごとに設定された地域との関わりの中で学ぶ科目として開講されています。全学部合計 127 科目 265 単位にあたる地域志向科目があり、各学部の専門教育の地域志向化を牽引しています。

全学部 地域志向科目数	科目数	単位数
	127科目	265単位

※2017年度現在

ふくしコミュニティプログラム

全学部
1年次

5つのステップで地域と関わる
リテラシーを育む地域志向学習

ふくしコミュニティプログラムとは

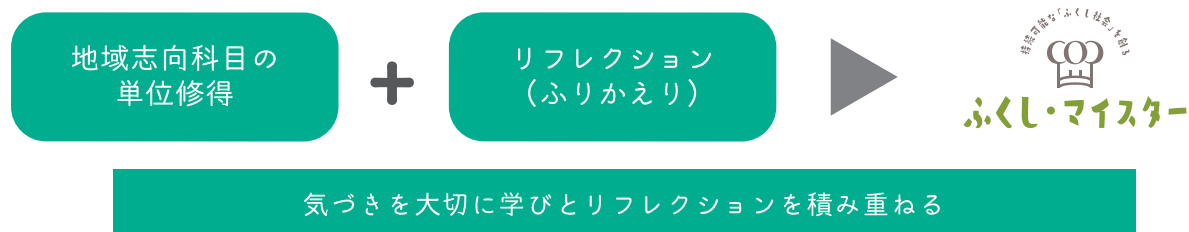
全学部の1年次全員履修科目または必修科目に、地域と関わる「ふくしコミュニティプログラム」を組み込んで、「①地域を知る ②調べる ③地域と関わる ④学習を深める ⑤成果をまとめる」といった5つのステップで学習を深めています。



リフレクション

「リフレクション」とは、自分の実施したフィールドワーク等の地域志向の学習を「ふりかえる」ことです。フィールドワークでは、自らの気づきを大切に、「学び」と「リフレクション」を積み重ねます。地域志向学習を通して、自身のこと、地域のことに関心を寄せ、社会への問題意識などを育むために、リフレクション(ふりかえり)を大切にしています。

ふくし・マイスターを目指す「リフレクション」



社会福祉学部



高齢者・障害者・児童・生活困窮者などの区別なく、地域に暮らす誰もがその人の状況に合った支援が受けられる“地域包括ケア”体制の構築が急務とされています。

社会福祉学部では、こうした要請に応える人材育成をめざし、専門分野を深く学ぶとともに、専修相互の連携も重視した専修制を導入しました。また、地域において専門職間の協働が重視されることから、他学部や他大学と連携した“多職種連携教育”を行います。

総合演習



地域で学ぶ体験をみんなで共有 ～春季セミナー～



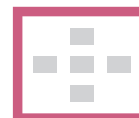
1年生の「総合演習」で「ふくしコミュニティプログラム」を展開します。合宿型の研修プログラム「春季セミナー」の中で、地域へのフィールドワークや宿泊体験などの共有体験を通じて、人とのコミュニケーションの大切さや方法を学びます。さまざまな地域の方の声に耳を傾け、感じ取ったことをまとめ、仲間と共有するプロセスを通して、大学で学ぶ力を身につけます。

子ども発達学部



子ども発達学部では、子どもの豊かな人間形成を支える専門家を4つの分野で育てます。地域の小中学校・特別支援学校・子育て支援センターなどの現場で学ぶ機会を設けることにより、子どもを取り巻く家族や地域社会まで視野を広げ、そこに起こる問題を解決できる力を養います。

総合演習II



地域の実践者から学び、子どもを取り巻く課題を捉える

1年生の「総合演習II」では、教員として活躍する先輩の話を聞きました。専門分野の知識の獲得だけでなく、在学中から地域の中で実際の経験を獲得することが3、4年次の学びに活かされてるとの先輩の経験談に、皆熱心に聞き入っていました。子ども発達学部では、現場のニーズに気づき、的確に応える力を持った専門家の養成をめざしています。



健康科学部



健康科学部では、リハビリテーションや介護など“人”が行う支援と、福祉機器や情報システム、住まいや環境といった“モノ・空間”による支援、2つの方向から、健康で質の高い生活を支えます。人間理解とふくしの視点をベースに実践的な専門技術を身につけていきます。

情報処理演習・環境共生入門



人と文化・歴史に学び、ふくしを考える

リハビリテーション学科では、「情報処理演習」の講義を活用して、地域福祉に携わるNPOの代表や地域連携コーディネータをゲストに招き、ふくしコミュニティプログラムが展開され、グループワークでは私たちができる「地域活動」を考えました。また、福祉工学科では、「環境共生入門」の授業の一環で、愛知県豊田市にある「とよた Ecoful Town」にバスで訪れ、環境と福祉住環境の視点で施設の見学を行いました。



経済学部



経済学部では、経済・経営の専門分野だけでなく、人間や社会を理解し、人々の幸福を考えて経済を動かすことができる、「ふくしマインド」を身につけた人材を育てます。特に、現場で考え行動するフィールドワーク学習を重視。地域の方々と協働することにより、社会で活躍するための実践的な能力を身につけます。

基礎演習Ⅰ



踏みしめて気づく。地域で私たちができること

1年次の「基礎演習Ⅰ」では、東海キャンパスが位置する東海市や近隣の知多市をフィールドに地域関係者と連携をしながら学習を行いました。グループごとに興味関心のあるテーマについて調べ、最終講義では合同発表会を実施しています。上級学年でも、東海市を含む近隣自治体、経済団体や企業、教育機関と交流しながらリアルな経済学を学んでいきます。

看護学部



看護学部は、学生ひとりひとりが、自ら学び、考え、問う力を育み、人々に関心を抱き理解を深める感性を涵養し、個別性に対応できる看護の実践能力を備え、地域社会の保健・医療・福祉に対して真摯に対応できる看護専門職の育成を理念としています。

基礎ゼミナールⅡ



看護の実践能力を備え、地域と人の健康を考える

1年生の「基礎ゼミナールⅡ」では、身近な地域への関心を高めるために、学生が設定したテーマ別に、東海市の7つの事業所でフィールドワークを行いました。「東海市の健康を考える」というテーマで調べ学習を行い、統計データや関係者へのインタビュー調査の情報をまとめ、成果報告会では、課題解決にむけた方策をまとめます。これらの過程を通して、コミュニケーションスキルや論理的思考力などを養います。



国際福祉開発学部



国際福祉開発学部では、英語や ICT の活用も含めた「多文化コミュニケーション力」と、多様な意見を取りまとめて前に進める「ファシリテーション力」を備え、世界の人々が抱える問題の解決に向けて行動できる人を育てます。そのため海外の学生とともに研究発表、国際的なフィールドワークの機会を充実させています。

基礎演習Ⅰ



多文化を理解し、ふくしを創造する

1年次の「基礎演習Ⅰ」では、自分の考えをまとめて、相手にわかりやすく伝えるプレゼンテーションの技術を身につけるために、身近な地域課題を取り上げて、グループ学習を行いました。その成果を思い思いの表現方法でまとめてプレゼンテーションを行いました。学生は、ただ情報を集めるだけでなく、集めた情報をもとに意味づけを行い、自分の意見として伝える難しさを経験しました。

スポーツ科学部



スポーツには自発的に体を動かすことの「楽しさ」をベースとした文化的な特性があります。だからこそ多くの人たちが継続的に楽しみ、そのことが健康や自己実現といった個々人の幸せに結びつきます。また、医療費の削減、スポーツの楽しさを伝える様々なビジネスによる経済的発展など健全な社会発展にも結びつきます。そして、オリンピックやパラリンピックでの素晴らしいパフォーマンスに私たちは感動し、元気づけられます。まさにスポーツの力です。

ふくしとスポーツを360° 科学する

スポーツ科学部ではスポーツの力を生理学、心理学、医学、バイオメカニクス、倫理学、社会学、教育学、歴史学、経済学など様々な角度から学ぶことができます。つまり、スポーツを 360° 科学するのが特徴の一つです。また、スポーツの力を生かすためにはスポーツの楽しさを子どもから高齢者まで、障害のある人や運動の苦手な人にも伝えられる指導者の存在が重要です。一人ひとりの特徴を理解し、個々に合った指導がスポーツ指導の原点です。こうした指導力をスポーツフィールドワークを通じて学んでいきます。



全学・学部共同・学内での取組

「ふくし・マイスター」を養成するため、実践的な学びとしての地域志向科目やそれぞれの専門性に対応した地域連携教育に関する取組を行っています。ここでは、主な取組の概要や事例などを紹介します。



サービslラーニング

社会福祉学部の演習科目の中で取り組む「サービslラーニング」では、知多半島 35 団体の福祉系 NPO と連携。夏休み期間中に学生が地域の NPO の中でさまざまな課題に取り組むことで、実践的な学びの機会につながっています。



地域研究プロジェクト

経済学部と社会福祉学部にて開講しています。「認知症プロジェクト」では東海市の NPO 法人「Heart to Heart」の代表の方と認知症啓発の課題を共有し、「認知症啓発アプリ」、「認知症啓発紙芝居」などのツールを開発しました。



地(知)のマイスター・地(知)のフィールド

地域の優れた知見・知識・経験を有した人や団体を認定・登録し、地域連携教育や地域志向研究において活躍していただく制度です。開始年度の 2016 年度には、「マイスター」として 20 名、「フィールド」には 21 団体のご登録をいただきました。



COC・DAY

本学が目ざす「ふくし社会」のあり方を地域と共有し、その実現に向けて学生と地域住民が学びあう場として 3 キャンパス（美浜町・半田市・東海市）の特色を生かし、地域課題に対応したテーマでのシンポジウムを行いました。



ふくしLAWARD

大学の授業や課外活動で学んだことについて、プレゼンテーション能力・ICT 活用能力を基礎にしてお互いの学びを「表現」し合う、全学部の学生が対象のプレゼンテーションコンテストを開催しています。

地域がキャンパス！～広がる正課外活動の取組み～



DoNabe-Net にっぷく



はんだU22研究所



東海ハングアウト

「教育」領域 中間成果

教育成果と今後の展開

今、地域の中では、少子高齢化の進行や人口減少の進展にともなう様々な課題が起こっています。例えば、0歳から100歳の地域包括ケアシステムの構築やまちの賑わいや地域づくりのこと。また知多半島では、大地震・大津波に備えた防災や減災の取り組みも積極的におこなわれています。日本福祉大学の取り組んでいる COC 事業では、こうした地域課題を大学と地域の方が一緒になって解決していくための教育や研究や社会貢献を進めて参りました。この「地域課題」を学修のテーマに据えるということが大きな特徴といえます。

今年は、この事業の5年間の折り返し地点となります。これまで取り組みにおける一番大きな変化は学生達の変化といえます。「ふくし・マイスター」の取得に向け、全学部が1年生の時から地域に出て、体験を通して地域から学ぶということを積極的に行ってきました。とくに「ふくしコミュニティプログラム」という5つのステップでの学修は効果が出てきました。ただ地域のことを知るだけではなく、能動的に働きかけていくことに特徴があります。それによって学生たちの地域へのイメージ、地域課題への認識の仕方が大きく変わってきているようです。

COC 事業は、こうした学生たちの地域連携教育を軸にしながら研究や社会貢献をつなげていくという展開が大きな特徴のひとつです。本学は従来から地域との連携を大切にしてきましたし、地域の方々に大変お世話になってきました。ただ以前のように「教育」と「研究」と「社会貢献」が縦割りでバラバラであった取り組みではなく、地域というフィールドの中で、その3つが相互に関わりながらバランスよく展開できるように進めていきたいと考えています。そして一人でも多くの学生達が、「ふくし・マイスター」を取得し、地域に貢献できるような人材になっていってもらえたらと期待しているところです。

今後の教育面の課題として3点あります。1つはこの地域連携教育を定着させていくことです。そのためには質のよい授業にしていくための教員側の授業研究が必要です。各学部での専門教育と地域連携教育を融合させていくことで、よりリアリティのある学びをつくっていくことが重要であると考えます。2つめは「ふくし・マイスター」の意義を地域と共有し、地域の教育力と連携したプログラムを開発していくことです。そのことによって知多半島に根ざした本学の教育特色が確立されていくと思います。3つめは教育の効果測定です。「ふくし・マイスター」を履修したことで、学生たちにどんな力が身に着いたかをリフレクションを中心に指標化し、見える化していくことが大切であると考えています。

COC 推進本部 副本部長
社会福祉学部 教授

原田 正樹

Masaki HARADA

市民研究員・地域課題解決型研究の活動報告

よりよいまちづくり(「ふくし社会」の構築)に寄与することを目的に、連携自治体である美浜町、半田市、東海市、知多市の地域課題に関わる研究テーマを設定し、課題解決に貢献できる可能性をもつ調査や研究を行う「市民研究員制度」と「地域課題解決型研究支援制度」を2015年度に創設し、地域と大学の相互交流による研究活動を促進しています。

※2016年7月に知多市と包括連携協定を締結したことを機に、2017年度より知多市にも対象地域を拡大

市民研究員制度	地域課題解決型研究支援
「COC事業」の一環として、住民の視点から具体的な地域課題を明らかにし、その解決の道筋を探求する調査や研究に対して支援を行う「市民研究員制度」を2015年度に創設しました。よりよいまちづくり(ふくし社会の構築)に寄与することを目的に、美浜町、半田市、東海市、知多市の地域課題に関わる研究テーマを設定し、課題解決に貢献できる可能性をもつ調査や研究に積極的に取り組んでいます。	COC事業の連携自治体(美浜町、半田市、東海市、知多市)の課題解決に向けた研究や、地域への「ふくし」の展開に係る本学教員の研究を支援する制度です。研究者の視点で地域課題を捉え、それぞれの専門性と本学のシーズを最大限に活かして研究を行うことで、各地域の課題の解決に繋がります。その成果は地域にも還元していきます。

市民研究員 研究概要一覧

2015～2017年度(※敬称略)

代表者		調査・活動テーマ	対象地区
2015年度 採択:4件	森 洋司	知多地域におけるCSV経営のビジネスモデルの提案	東海市を含む知多地域
	大嵯 晓美	他市町から学ぶ“ファミリー・サポート・センター事業のあり方”について	ファミリーサポートを実施している知多半島の市町とファミリーサポートが十分活用されている市町
	金森 大席	知多半島の多様な地域資源をつなげ、地域課題に向き合う人材育成のプログラムを作る	知多半島全域
	鈴木 雅貴	子育て世代をターゲットとした地域活性化	半田市中心市街地
2016年度 採択:4件	櫻井 雅美	子育て支援サービス有効利用のためのコーディネートについて	美浜町を中心とした知多半島全域
	加勢田 茂	若い人に食・栄養の重要性を理解してもらうための提言	知多半島全域
	成田 一郎	亀崎の旧家における歴史文化遺産の調査研究と地域活性化	半田市亀崎地区
	芳金 秀展	半田市における中心市街地観光の大ナゴヤ大学的アプローチ	半田市
2017年度 採択:7件	片山 麻有	子どもの多様性を大切にできる地域づくり	知多市
	赤坂 雪江	『古今半田衆』巻第一 半田停車場前	JR半田駅周辺
	溝口 昭弘	訪問型の支え合い活動と身近な地域拠点のあり方について	半田市亀崎中学校区
	杉山 直生	「収穫体験・調理実習」を基盤とした、シニア世代と子育て世代のマッチング	美浜町
	坂元 美香	中心市街地における世代間交流について	知多半田駅周辺およびJR半田駅周辺
	日比野 徳男	関係団体が協働して地域回想法を用いた多世代交流で地域の文化を伝承することにより、地域の人々が生き生きと暮らせるまちを創り出すための調査・研究	知多市
	後藤 文枝	東海市の重症心身障がい児の自立支援について、あるべきまちの将来像を、当事者や支援者とともに考える。	東海市全域

地域課題解決型研究 研究概要一覧

2015～2017年度

代表者		所属(学部)	調査・活動テーマ	対象地区
2015年度 採択:3件	渡邊 忍	社会福祉	ファミリーホーム(小規模住居型児童養育事業)の地域支援に関する研究	ファミリーホームが存在する美浜町、東海市、常滑市、大府市
	児玉 善郎	社会福祉	住民・大学・行政の協働による空き家を活用した地域福祉活動に関する実践的研究 -高齢者支え合い、子育て支援、防災・減災の活動を通して-	美浜町
	佐藤 慎一	全学教育センター	ICT活用による教員と地域住民とともに作り上げる国際交流 -グローバルな東海型都市づくりプランの構築-	東海市
2016年度 採択:8件	坂口 大史	健康科学	半田市「アイブラザ半田」の地域活性化に向けた利活用に関する研究	半田市
	吉田 直美	経済	美浜町布土学区を中心とした地域防災活動を普及するための取り組み -災害時要援護者の避難問題に焦点を当てて-	美浜町布土学区
	千頭 聡	国際福祉開発	知多半島のNPOが有する社会的な価値に関する研究 part-1 -NPOスタッフの意識と活動実態に関する調査を通じて-	美浜町・半田市・東海市を含む知多半島5市5町
	水谷 聖子	看護	半田市における子どもの貧困対策と居場所づくり -地域におけるさまざまな子どもの居場所のあり方-	半田市
	梅本 充子	看護	半田市におけるグループ回想法を用いた介護予防と自主活動形成への支援 -アクティビティとしての回想法-	半田市
	新美 綾子	看護	東海市における災害に強い街づくりに向けた支援 -潜在看護師のマンパワーを活用した災害支援共助システムの構築-	東海市
	山本 克彦	福祉経営	美浜町における災害にも強いまちづくりに向けた支援 -地域住民の“強み”をつなぐ災害支援共助システムの構築-	美浜町
	松岡 崇暢	まちづくり研究センター	知多半島内における人口増加に向けた地域づくりの成果と影響に関する研究	半田市亀崎中学校区
2017年度 採択:12件	吉村 輝彦	国際福祉開発	食を媒介とした対話や交流の場づくりから始めるコミュニティづくりの実践的研究 -知多市朝倉団地周辺地区を対象に-	知多市
	新美 綾子	看護	知多市・東海市における地域在住災害支援ナースの養成強化とナース間のネットワーク	東海市・知多市
	渡邊 亜紀子	看護	『学生主体活動型地域サロン』開設に関するニーズ調査と基盤づくり	東海市
	平野 隆之	社会福祉	地域包括ケアを支える権利擁護支援システムの研究 -知多地域成年後見センターの事例研究-	半田市、美浜町・東海市・知多市
	梅本 充子	看護	半田市地域高齢者に対するグループ回想法の介護予防および社会参加への有効性	半田市
	野尻 紀恵	社会福祉	美浜町における子どもを対象とした地域福祉拠点づくりに関する研究 -子どもの夜の居場所支援の実践を通して-	美浜町
	渡邊 忍	社会福祉	ファミリーホーム(小規模住居型児童養育事業)の地域支援に関する研究 その2 -グループ支援と個別支援の統合化を目指した包括的支援の実践研究-	美浜町
	高村 秀史	全学教育センター	美浜町における災害発生時の災害支援拠点、避難所生活に向けた支援 -アウトドアのノウハウを生かした体験型『防災・減災キャンププログラム』の構築-	東海市や美浜町を中心とした知多半島全域(5市5町)
	佐藤 大介	全学教育センター	地域包括ケアシステム構築に向けた生活支援コーディネーターの養成	半田市
	原田 正樹	社会福祉	知多半島における「0歳から100歳の地域包括ケア」構築にむけた萌芽的研究	半田市、東海市、美浜町
	曲田 浩和	経済	新田開発地の歴史的資源の活かし方 -川南新田の歴史発見-	東海市
	坂口 大史	健康科	半田市赤レンガ建物と周辺地域を含めた地域活性化まちづくりに関する研究	半田市

研究交流会・報告会の実施

COC研究交流会

住民の視点から具体的な地域課題の解決に取り組む市民研究員と本学の教員による COC 研究交流会を開催しています。交流会では、これまでの研究進捗を報告するとともに、それぞれの視点から情報交換を行っています。

開催実績

- 2017年度COC研究交流会：2017/6/28(東海キャンパス)
- 2016年度COC研究交流会：2016/6/23(東海キャンパス)
- 2015年度COC研究交流会：2015/6/11(東海キャンパス)



2017年度



2015年度

市民研究員・地域課題解決型研究 研究成果合同報告会

市民研究員および本学教員が1年間、地域課題の解決に向けた研究活動に取り組んできた成果を報告する場として「市民研究員・地域課題解決型研究 研究成果合同報告会」を毎年開催しています。

開催実績

- 2016年度研究成果合同報告会：2017/3/5(東海キャンパス)
- 2015年度研究成果合同報告会：2016/2/11(東海キャンパス)



報告会の様子

地域研究プロジェクト報告会

社会福祉学部、経済学部、国際福祉開発学部の学生が履修する科目「地域研究プロジェクト」では、知多半島をはじめとする自治体や地域関係者と連携・協働し、地域振興や、まちづくりにかかわる諸事業を展開しています。「地域研究プロジェクト」は2012年に開講し、以来定期的にその成果や取り組み・実践の報告を行っています。

開催実績

- 2016年度 地域研究PJ報告会：2017/1/26(美浜キャンパス)
他多数



報告会の様子

「研究」領域 中間成果

1. 地域課題解決型研究助成

連携する4市町の地域課題の解決に資する研究として進められている地域課題解決型研究は、応募・採択件数も順調に増加し、当初の予定通りの規模で進められています。

【現段階での到達点・中間成果】

- ◎現段階での到達点としては以下のような点が挙げられます。
 - ・ 地域の問題把握や研究課題の抽出に対して教員の関心が高まったこと
 - ・ 連携市町が抱える地域課題に向き合った研究活動が広がってきたこと
 - ・ 市民や学生を巻き込んだ研究活動のスタイルが広がり、定着してきたこと
 - ・ 研究成果を地域に還元していく機会が増えてきたこと

【今後の課題】

- ◎残りのCOC事業助成期間およびそれ以降の研究制度の発展を考えた時、現時点では以下のような課題があげられます。
 - ・COC事業助成期間終了後の研究制度をどう維持していくか
 - ・ 研究成果を地域に還元していくための機会・しくみ
 - ・ 教員と市民がともに参加するフォーラムなどの定期的な開催

2. 市民研究員制度

市民からの提案に基づいて審査・採択されている市民研究員制度も、応募が順調に増加するとともに、提案されてきた調査研究内容にも幅と厚みが増してきました。

【現段階での到達点・中間成果】

- ◎現段階での到達点としては以下のような点が挙げられます。
 - ・ 市民活動と調査研究との違いが徐々に明確に認識され、研究らしい成果が見えてきたこと
 - ・ 研究の着眼点が課題を身近に感じている市民ならではの着眼点に満ちていること
 - ・ 地道に地域を回るなど、地道な活動が展開されていること
 - ・ 教員との連携が深まってきたこと

【今後の課題】

- ◎市民研究員制度の充実のためには以下のような取り組みが一層必要だと考えます。
 - ・ 市民研究員に対する教員からの研究支援や研究上の連携
 - ・ 市民研究員の活動に関わって学生の活動との接点づくり
 - ・ 市民研究員が研究をさらに発展させるために、財団などの助成団体への研究助成申請に対する支援
 - ・ 市町村が行っている市民活動支援のしくみに対する連携

地域連携推進機構長・国際福祉開発学部 教授

千頭 聡

地域連携推進拠点を核とした取り組み

地域連携推進拠点 Cラボ

Cラボ(しーらぼ)は、地域と大学の協働を創る地域連携推進拠点として、地域の課題と大学の教育研究をつないでいます。

地域と大学が共に学び、成長する新たな地域連携モデルの実現に向け、2015年にはクラシティ半田(現CLACITY)、ソラト太田川にも開設しました。

活動フィールドを地域とし、学生がそこにある課題に取り組むことで、地域と大学がともに成長していく社会づくりを進める役割を果たしていきます。



Cラボを交差点に多様な人々のつながりをつくります

Cラボ美浜

美浜キャンパス内 2013年開設



Cラボ半田

CLACITY 3F 2015年開設



Cラボ東海

ソラト太田川 3F 2015年開設



広がる市民との協働・地域円卓会議

地域連携推進拠点とともに、地域課題を持ち寄り、持ち帰る場として「地域円卓会議」を開催しています。世代を超えた意見・情報交換を行い、多様な立場の方と出会うことで、ネットワークが構築されるだけでなく、新たな取組につながっています。



ちやぶ台ミーティング
(美浜町)



知多半田駅前地域
円卓会議(半田市)



はんだU22
研究所(半田市)



東海市地域大円卓
会議(東海市)



東海市地域円卓会議
実行委員会(東海市)

知多半島に広がる共同・協働



イルミネーションの灯りで地域をつなぐ

2016年度冬、「MIHAMA ILLUMINATION 2016」が開催されました。点灯式には1,000人以上が訪れ、本学のアカペラサークルもステージに立ち、会場を盛り上げました。この取組は、地域団体や町民、本学職員が実行委員となって実施されました。



あそべる大屋根広場2day'sを開催

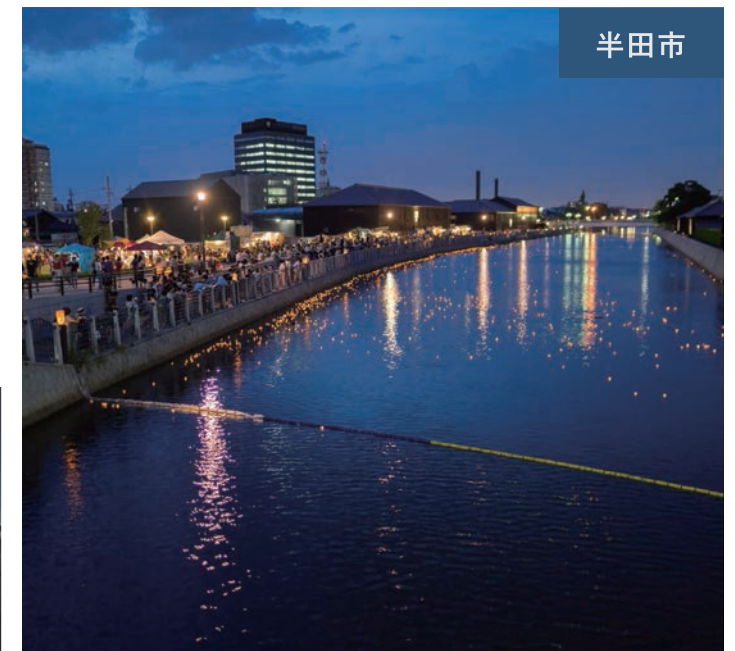
国際福祉開発学部の学生が「日本福祉大学 RED」を結成し、NPO法人学童保育ざりがにクラブさんと一緒に、太田川駅西側のイベント広場(通称「大屋根広場」)で「あそべる大屋根広場2day's」を開催しました。

運河の魅力再発見!「半田運河 Canal Night」

2016年から始まった「半田運河 Canal Night」は、8月下旬の夜に開催され、運河にみんなで投げ入れたヒカリの玉を眺めながら地域のお酒や食事を楽しんだり、黒壁の蔵の立ち並ぶ夜の運河沿いを歩くイベント。2度目となる2017年は金・土2日間で約1万人もの人が訪れ、大いに賑わいました。半田市、半田市商工会、観光協会などとの協働で行われる本イベントは、中心市街地と運河周辺エリアの賑わいと回遊性を高め、新たな魅力を伝える夏の風物詩との一つとなります。



シャボン玉による空間演出
(坂口大史 助教)



「ちた未来塾」で
思いをカタチに



「Chabs(チャプス)」
地域交流拠点



MIHAMA Fes.
～地域の魅力発掘市～



亀崎景観向上PJ エアコン
室外機カバー制作



太田川駅前に1日限定開店
オープンカフェ「Fun Cafe」

「社会貢献」領域 中間成果

社会貢献の成果と今後の展開

日本福祉大学では、開学以来一貫して、地域と社会に貢献するために教職員および学生が様々な活動に取り組んできました。

たとえば、半田キャンパス内に設置されている生涯学習センターは、キャンパス開設以来 20 年以上にわたって、半田市民の生涯学習活動に大きな貢献を果たしてきましたし、地域活動に中心的な役割を果たしてきた教職員も少なくありません。また、学生にサークルの中には長期にわたって地域の子どもや障がい者の支援を行ってきたサークルもあります。

COC 事業の枠組みの中では、教育・研究とならぶ 3 つの柱の一つとして社会貢献が位置付けられていますが、本来、教育や研究と切り離されて社会貢献活動が存在するわけではなく、教育や研究を含む大学の諸事業全体の中に、社会貢献的な要素が含まれてきました。その蓄積の上に立って COC 事業に取り組んできたことにより、連携自治体のみならず、地域で課題解決に取り組んでおられる市民や企業、団体から、大学の資源を活用したい場合に、以前にまして大学に対してアプローチがしやすくなったとの声をいただいています。

今後は、日本福祉大学における諸事業の中で社会貢献的な側面を常に意識しつつ、教育や研究とさらに連携を深め、そこから、新たな教育や研究につながり、好循環を生み出すことが大切だと考えます。

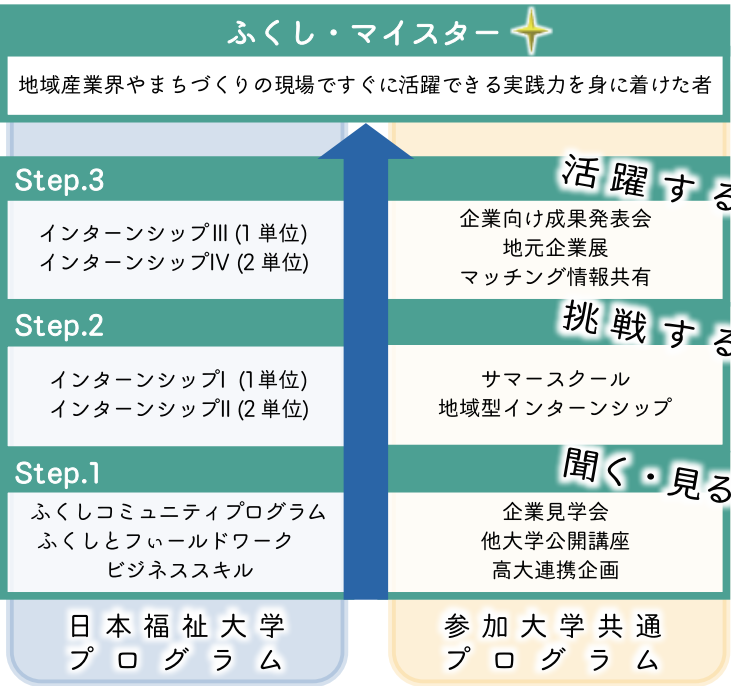
地域連携推進機構長・
国際福祉開発学部 教授
千頭 聡
Satoshi CHIKAMI

概要

大学 × 産業界 × 自治体が協働して 岐阜県への就職をサポート

地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）とは

地方の大学群と、地域の自治体・企業やNPO、民間団体等が協働し、地域産業を自ら生み出す人材など地域を担う人材育成の推進を目的としています。



現場ですぐに活躍できる 実践力を身につけた 「ふくし・マイスター +」を養成

日本福祉大学の COC+プログラムは、実践を通じて地域創生に必要な力を養成していきます。各ステップを踏んだ学生は、地域性を理解し、地域産業界やまちづくりの現場ですぐに活躍できる実践力を身に着けている証明として「ふくし・マイスター +（プラス）」の称号を得ることができます。この称号を得ることで、地域で働く際に即戦力を示せる大きなポイントになります。

教育

参加大学で学び合う**共通プログラム**

サマースクール



参加大学共有プログラムのサマースクールは、COC+ 参加大学の学生が一堂に会し、地元企業や自治体、その地域を支えている方々と一緒に、地域の将来を考えていきます。フィールドとなる地域の現状や特徴を、自らの目で見、耳で聴き、能力を磨いて、今後のキャリアの選択肢を広げることを目的としています。

2016 年のフィールドは岐阜県の東濃地域。恵那市、中津川市、多治見市の 3 コースに分かれて、5 大学から集まった初めて会う学生同士でチームを作り、たくさんの意見を交わしながら地域の未来に向けた企画提案をまとめていきました。

<参加学生の声>

初対面の人とチームを作って課題を達成する経験は初めてでしたが、自分から周りに関わって、課題達成に向けて頑張っていけば十分通用すると自信ができました。周りとかかわる中で相手の良さや強みを見つけて、引き出してチームを作っていくことが得意だと気づきました。

<担当教員のコメント>

地域成長につながる重要な地域課題を学生が意識したことが大きな成果でした。それだけに、提案の中で、「その地域だからこそ」の部分が今後の改善点でした。「魅力を知る」という、シンプルで難しい問題にたどり着いた学生の今後の成長に期待したいと思います。

企業見学会

地元企業との接点を持つことで、大学での学びと地域や地元産業・企業とのつながりを深く認識するとともに、学生自身のキャリア形成意識の向上を図ることを目的としています。2016 年度は 6 日間計 12 箇所の企業を訪問し、本学から 11 名の学生が参加しました。



成果報告会

今年度各大学の学生が取り組んだ COC+ の活動内容を関係者の方々に報告し、活動を広く周知する目的でおこなわれています。本学からは国際福祉開発学部の町野紗希衣さんが、夏に参加した飛騨地域での農業体験プログラム「ワーキングホリデー in 飛騨高山」について発表しました。



教育

日本福祉大学生で学び合う**本学独自プログラム**

卒業生インタビュー



卒業生インタビューでは、岐阜県で活躍する本学の卒業生の話を直接うかがい、地元に戻って働くことの意義や意味に触れながら今後の自身のキャリアプランについて考えていきました。岐阜県内他分野の 14 事業所、計 16 名にご協力いただきました。

<参加学生の声>

働きたいという想いがより強くなりました。同じ岐阜出身で同じ大学に通っていた先輩とお話し、自身が働く姿を想像できるようになりました。仕事をするきっかけや、その仕事のやりがいを知り、自分がやりたい仕事はなんなのかを見つめ直すきっかけになりました。

<参加学生の声>

社会で働く方と仕事について色々なお話することは初めてで貴重な体験でした。地元で働くことの良さや、多くの人と会って話をする仕事に興味が出てきました。また、今後、インターンシップなどに参加してみたいと思います。

福祉現場見学会

地域包括ケアを実践されている和光会グループを訪問し、福祉現場の体験ツアーを行いました。現場で活躍している職員の方の生の声を聴き、自分の目で現場を見ることで、これまで大学で学んできたことが線のようにつながり、体感的に福祉の仕事を理解することができました。



学生の“ やってみたい ” を後押し

“ スクールソーシャルワーカーについて知りたい ” との希望をうけ、子ども家庭支援センター「麦の穂」で相談員をされている卒業生の石田公一さんに、社会福祉学部の原 奏恵さんとお話を伺いに行きました。また、児童養護施設の訪問や、記事の書き方講座、誌面デザインの講座、写真の撮り方講座も開催しました。岐阜県で活動したい学生の声を後押ししています。



ひろがる岐阜県の輪・活動の輪

岐阜県人会

岐阜出身学生のつながりや交流を深めるために、岐阜県人会を発足。2016年度は美浜キャンパスで3回の交流会を行い、そこから卒業生インタビューなどの他の活動につながりました。2017年度は、登録者も40名以上になり、さらなる活動が動き出しています。



事業広報

COC+では、事業広報のために毎月1回広報誌「COC+通信」を発行しています。また、活動の状況をリアルタイムでお伝えするブログ「COC+WEB通信」、イベントの案内をお届けするメールマガジン「GIFUTO」など複数のツールを利用して情報を発信しています。



COC+WEB通信



岐阜キャリア相談コーナー

東海キャンパス <キャリア支援室内>

- 受付：火・水・木曜日 10:00～18:00
※キャンパス閉鎖期間除く
- 電話：0562-39-3811
- 担当：就業支援コーディネータ 星野

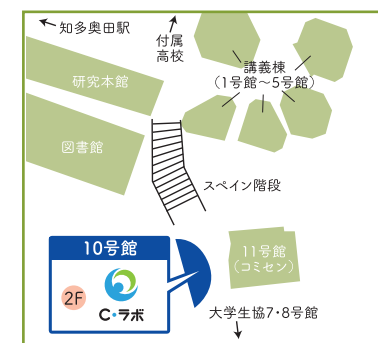


美浜キャンパス <サービスラーニングセンター内>

- 受付：月～金曜日 10:00～17:00
※キャンパス閉鎖期間除く
- 電話：0569-87-2321
- 担当：就業支援コーディネータ 小西

※2017年度現在

地域連携拠点  **C・ラボ** に、ぜひお越しください。



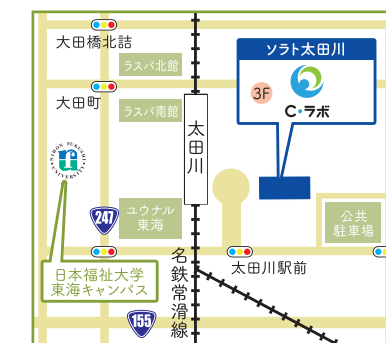
Cラボ 美浜

- < 美浜キャンパス10号館 2階 >
- 電話：0569-87-2430
 - FAX：0569-87-2292
 - 開室：月～金曜 ※祝日除く
9:30～11:00 12:30～17:00
 - 担当：地域連携アドバイザー 廣澤



Cラボ 半田

- < クラシティ 3階 >
- 電話(直通): 080-2629-4150
 - 開室：月～金曜 ※祝日除く
9:30～17:30
 - 担当：地域連携コーディネータ 池脇



Cラボ 東海

- < ソラト太田川 3階 >
- 電話(直通): 080-8979-7394
 - 開室：月～金曜 ※祝日除く
10:00～13:00
 - 担当：地域連携コーディネータ 村松

※2017年度現在

平成26年度採択 文部科学省 地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)
中間成果報告書

編集 日本福祉大学COC事業推進本部
発行日 平成29年 9月 8日

大学は地域の中へ、地域は大学の中へ



ふくし・マイスター

